

龜谷
行編

脩身兒訓

三

T 1A4

22

Ka 36



a 1 3 8 0 3 2 1 8 2 5 a

福岡教育大学蔵書

脩身兒訓卷之三

龜谷行編

第一章 立志

○道近しと雖ども。行うさまに至らば。
事小なりと雖ども。爲さずを成らば。
韓詩

外傳

○有志の士と利刃此如し。百邪辟易す。
無志此人と鈍刀の如し。童蒙侮翫す。
言志

脩身兒訓

卷之三

一三

録

○人事百般をばく遜讓を要す。但志を師に譲らざるべく。又古人に譲らざるべし。同上

○馬援曰く。丈夫の志たる。窮してハ益堅まるべし。老てハ益壯なるべし。

第二章

勉強 愛日

○陶淵明の詩に曰く。盛年を重く來り

む。一日を再び晨かり難し。時を及びて當に勉強をべし。歲月を人を待たず。

○勃古斯敦曰く。我、他人より一倍の光陰を用ゐ。一倍は勞苦を爲さば。必は他人乃成せる事業を成し得べし。歐米士

志金言

○光陰の重んぶべきを知るときハ。定期を怨らざるの習。自りと生むべし。同上

○禮諾爾圖曰く。辛苦此事也。卓絶の才

に進むべきの道なり。絶妙の地位也。辛苦の人此獲べき恩賞あり。同上

○常小勞作して已まじ。職業の繁多なるを嫌えず。世務に任じ。他人と交通し

實事小砥礪するを。人生此主義なり。西洋

品行論

○を一事の成就せんことを望まば。自ら往て志を成爲すべし。も一事此成

就せんことを望まざれば。他人より吟唱

すべし。歐米立志金言

○那比爾曰く。困難愈甚しければ。愈多

く勞苦を爲さべく。危険愈甚しければ。

愈多く勇氣を顯さべし。同上

○勤勉の人を。萬物を化して。黄金と爲

その術あり。光陰と雖ども。亦之を黄金

と化さべし。同上

第三章 學問

○嘉肴ありと雖ども食まざるは其旨を知らざる也。至道ありと雖ども學をばれば其善哉知らざる也。禮記樂記

○朱子曰く。學問の道。敢て自ウト是なりとせず。虚ウテ以て人カ受ムバ。自のら得ることあり。

○又曰く。學を爲さぬ。須トク今ハ是

み。昨日ハ非あると覺ゆべし。日ハ改め月ハ化して。便ち是長進也。

○薛文清曰く。他事をして。學を好むの心ハ勝と云めざれば。必ず進むことあり。○倪文節曰く。書を觀るおと一卷をれむ。一卷の益あり。書を觀ること一日を。一日の益あり。

第四章 交際

○荀子曰く。我を非やまらざる者ハ吾
ガ師あり。我を是とて當る者ハ吾ガ
友あり。我ハ諂諛ある者ハ我ガ賊あり。
○善人ハ璞玉の如く。惡人ハ錐鑿の如
く。玉錐鑿を經ざせば。器を成さず。凡そ
我を毀る者ハ。乃我を成る者也。紳瑜

○小人固より當り遠くべし。然れども
亦顯る小仇敵となさるべからず。君子固

と當り親むべし。然れども亦曲て附
和さべからず。頤體集

○事を人に問ふハ。虚懷を要す。毫も挾
其所あるべからず。人ハ替て事我處を
るを周匝を要し。稍缺く所あるべから
ず。言志錄

○人ハ談話を好む。屢々重し。長らるべ
からず。長談を人を倦ましめ。人ハ嫌む。

智氏
家訓

○人と論ぐるハ。須らく容顔從容。言語
温厚なふべし。決して劇烈な言ふべ
し。紳瑜

○人乃詐りを覺るも之を説破せし。其
自ら愧る我待て可なり。若し夫れ愧を
知らざる人ハ。又何我責せん。金言

○人の小過を責めし。人れ陰私を發し

或人の舊惡を念たず。三乃者を惟以て
德を養ふに在る所也。亦以て害を遠ざ
くべし。遵生
ハ牋

○年高くとく徳なく。貧極りて恥ま
け惡ふして禮我顧みず。愚謬ふして禮
我明ふせし。此四等の人也。與に較ぶる
べし。習是
編

○一坐の中。好て言を以て人を彈射を

ふ者あきだ。吾宜く端坐沈黙。以て之

を銷を^ぶ。此戔不言の教や^集。願體

○人此私語を見てハ。耳を傾て竊小聽

くま^と勿き。人此私室小入りてハ。目を

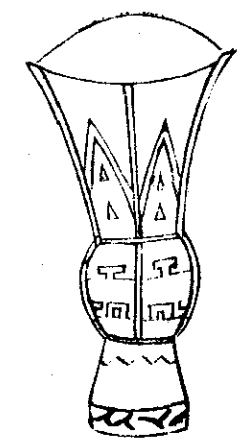
側て旁觀するこや勿^れ。同上

○隣家喪あれた。快飲高歌を^ぶる^べ。

新喪の人小對。劇談大笑を^ぶる^べ。^神

○薛文清曰く。郷人小處する。皆當小敬

觚不觚



觚哉觚哉

して之を愛むべし。

三尺の童子と雖ど

も。亦當小誠心を以

て之を愛すべし。侮

慢を^ぶらば。

○又曰く。人の微賤

小於る。皆當小誠敬

を以て之を待つべ

一。怒せよ。慢るべからず。

○子弟僮僕。人とあひ争ふ者あまば只
自ら戒飾を行ふべし。怒我別人より加
ふべからず。金言

第五章 處事

○事を做す。最も宜く熟思緩處を要し。
熟思を要む其理を得。緩處をれば其當
を得。紳翰

○遠路に書札を寄するに當り前々
に於て之を成すべし。發するに臨み勿
々之を成すべし。必に遺漏多し。金言

○人の書畫を借り。損汚遺失をべから
ず。閱し畢らば。即ち還すべし。借書中。偽
字ありば。隨て別紙を以て記出。本條
の下に置くべし。同上

○貝原益軒曰く。盛怒乃時より方り。慎で

妄小簡を與へ。言を發むること勿れ。之を妄小すまば。必ず悔あり。

○許平仲曰く。盛怒の時小於て。堅く忍びく動さず。心平あるを俟ち。審小して之小應む。庶幾くバ失ふ。

○徑路窄き處ハ。一步を留め人小與へて行々去め。滋味ある時ハ。三分を減ト。人小譲りて嗜まむ。此ハ是世殘歩る

の法あり。習是編

第六章 治産

○彌爾列爾曰く。工事を勤むるハ。たと

ひ極て勞苦の業ありとも。中ハ無量の樂趣充滿。又自ら々此身を進修する所以の具あり。歐米志金言

○たとひ卑賤ある辛苦乃職業とりとも。毎日我の定課を完うたらんハ。

と此他の時間。盡くみる甜美なるを
覺ゆべきなり。同上

○辛苦して賤工を爲し。艱難して衣食
を得る。百事具足し。枕を高くして。眠
る。此を我れ。更の幸あり。同上

○正直に生業を爲し。人に害を加へず。
己に属せざる物を之を其主に還さべ
し。同上

○和睦勤儉な者。家必ず隆え。乖戾
驕奢なる者。家必ず敗る。此理。券を操
るが如し。断々爽えず。且之を驗するに。
甚ど速くあり。金言

第七章 安分

○譚子曰く。奢る者。富とも足らば。
儉なる者。貧乏くても餘あり。奢る者を
心常に貧しく。儉なる者を心常に富む。

○分ふ過とぎ福を求めた。適し以て禍を速く。
あんな分ふ安んど禍わざ遠はくせぞ。將まさふ
自ら福を得んとし。紳しん瑜ゆ

○人の一生も路を行くが如ごとく。一歩いっづ
進むとや。或ある以て足れりとおもふ。歐米立
志金言

○伯氏はくし曰いく吾われが富とた。吾われが産業の大おほき
るふ非あらざらず。吾われが需用の少すくきふあり。

第八章 倫常

○白虎通はくと曰いく。三綱さんかうとも何の謂いぞや。

君臣父子夫婦を謂いふなり。君は臣に綱かうとなり。父は子に綱かうとなり。夫は妻の綱かうとなり。

○孟子曰いく。父子親あり。君臣義あり。夫婦別あり。長幼序あり。朋友信あり。

○貝原益軒曰いく。孝は百行の本あり。故
人ひととして孝ありて終はむ。其本先もとに絶
也。他の善行良才ありと雖なも。觀みるふ

足らむ。

○曾子曰く。父母之を愛まむ。喜て忌れ。父母之を惡めむ。懼て恐む。父母過ち有まむ。諫て逆まぬ。

○程伊川曰く。病て牀に卧し。之を庸醫が委ぬるは。不慈不孝に比る。親に事ふ者。亦醫を知らざる可らむ。

○父母は其子の顯榮を以て。己の幸と

為す。故に小子とる者。其恩を忘ま。惡業を行む。父母として憂ふ事とせむ。勿れ。勸善

訓蒙

○兄弟を過失ありと。互に慎んで之を隱諱せむ。同上

○人。友悌を欲せば。一身の欲を抑制し。常に兄弟姉妹を惠愛し。其益を思ふこと。猶己の益を欲するがごとくせむ。同上

○族人を皆其祖先
 を同うし。其の一家
 我爲るものなり。故
 互に親愛し。互に
 保護し。其家名を損
 せし之。我子孫に傳
 ふべし。同上

勤儉治家之本
 讀書起家之本
 和順齊家之本
 循理保家之本
 繼宋文公語

るを猶其父母を愛敬するがごとく見べ
 一。若し國に於て非理の事を爲すと雖
 ども。我之を怨みて。其害我爲るべし。同上
 ○谷^グ慈^レ西^セ曰く。我が財貨。我が性命ハ。我
 の属するものなり。歐米立
 志金言
 第九章 尊徳
 ○陳幾亭曰く。人々周うす我を樂む者

は。自々ら奉ずるふと。必也薄し。身も奢
ふ者も。恵やの親不及むべ。蓄徳録

○呉懷野曰く。其心厚に者も。其福厚し。
其量弘き者も。其徳弘し。日計足らざる
ども月計餘りあり。同上

○人乃短を匿はむ。人の急を申くも。さ
るハ。仁義の人ハ非ざる也。同上

○君子能く人の危きを扶け。人の急を

多くふ。固く是美事なり。誇らざるを

益善し。願體集

○恩を施すと雖ども。後ハ其報を得ん
と申るの念ある者ハ善を行ふにあら
ず。唯恩を交換以るのみ。之ヲ稱譽する
不足らむ。勸善訓蒙

○人々己の産業と。他人ハ窮乏を比
較し。以て恩を施さむ。同上

○小人専ら人此恩を望む。恩過ぐきバ感ぜば。君子輕く人の恩を受ず。受くれば忘る難し。紳瑜

○我人功あきバ念ふべからず。而して過ちん念むざる處からず。人我恩所從ど忘るべからず。而して怨を忘るは難し。同上

○薄福の者も必ず刻薄あり。刻薄なれ

を福更に薄し。厚德の者も必ず寛厚なり。寛厚なれば徳更に厚し。同上

○貧者の悲叫を聞きて。感動をざる者。真に薄情と謂ふ也。他日已に悲し叫ぶことあらん時。人之を聞きて。憫まざる也。雜語

○汝。他人を恤まば。人も亦汝を恤まん。汝善く他人を遇せば。人も亦善く汝を

遇さん。同上

○孔子曰く。善を為る者ハ。天之下報る
不福を以て。不善を為る者ハ。天之下
報る。禍残以て也。孔子家語

○陰徳ある者ハ陽報あり。陰行ある者
を必以昭名ある。淮南子

○父母善を積めた。子孫家を固くし。父
母善を積まされたる子孫家残覆也。勸懲
雜話

○善ハ善報あり。惡ハ惡報あり。善惡報
をた。時節未ど至らば。事林
廣記

○劉宗周曰く。一時人を勸するハ口
を以て也。百世人を勧むるハ書を以
て。善本を刊刻し。廣く流布を以て。
亦人と善をなす乃一端なり。劉氏
人譜

第十章 躬行

○薛文清曰く。天地を吾ガ父母なり。凡

そ行ふ所あるを。吾父母の命に順ふこととを知るのこ。其他を恤ふるに違ふらんや。

○又曰く。天を敬むること。當り吾が心を敬するより始む。其心我を敬するこや能はざる。能く天を敬すと謂ふ者も妄あり。

○胡文定曰く。心を立つるにハ。忠信を

去て。欺のざるを以て主本といふ。

○孝悌忠信を身を立てるの大本。禮義

廉耻を己を行ふの先務あり。

省心
雜言

○坡可羅曰く。智識ハ日新進動の活物

あり。道德ハ萬世不易の定則あり。

○難に臨まざれば忠臣の心を見ず。財

に臨まざれば義士の節を見ず。

省心
雜言

○丈夫一生廉耻を重しといふ。切に人

求る勿也。死生命あり。續小児語

○凡そ児童ハ。須らく是衣冠整齊。言動

端莊あるべし。廉耻の二字を識り得也

バ。自然に正大光明の氣象あり。言行彙纂

○子貢問て曰く。一言にして以て身を

終身まで之を行ふ能き者ありや。子曰

く。其恕ろ。己が欲せはる所ハ。人亦施す

を勿れ。

○中庸子曰く。忠恕道を違ふると遠か

らば。諸戎己が施して願むらんバ。亦人

を施すを勿也。

○朱子曰く。己が心を盡すを忠とまし。

己が推して人不及以て恕と為す。

○司馬溫公嘗て言ふ。吾人亦過る者な

し。但平生為る所の事。人亦對して言ふ

べからざる者あり。劉氏人譜

○省心録云曰く。晝の為に所ハ。夜必ぞ之を思ひ。善あきバ樂ミ。過あるバ懼る。君子ある哉。

○一日の中。或ハ一善言を聞た。一善行を見。一善事残行へバ。此日虚しく度らべし。紳瑜

○衣垢きて洗たむ。器缺て補たむ。人子對して猶慙る色あり。行垢せし洗たむ。



周廟 金人

三緘 其口

徳缺て補たむ。天子對して豈に愧る心無うらんや。樵談

○程子曰く。言語を慎ミ。以て其徳を養ひ。飲食戒節ミ。以て其體を養ふ。事の至近ミ。一て。繋る所

至大ある者々。言語飲食ふ過ぐるハ莫し。
○富貴ハ傳舎の如し。惟謹慎るまむ久
く居ふことを得難し。貧賤ハ敝衣の如
し。惟勤儉素積を以て脱卸せべし。習是編
○家長禮を知まば。男女勤儉。衰門雖
と亦必ぞ興るあり。其一時の貧富ハ。
未だ論むるに足らば。紳瑜
○政を為るに要あり。公と曰ひ。清と曰

ふ。家を成るに道あり。儉と曰ひ。勤と曰
ふ。省心

○司馬溫公曰く。凡々諸の卑幼。事大小
となく。専らに行ふことを得るのみ。必
ぞ家長に咨稟せよ。

○自ら重んぜざる者ハ辱を取り。自ら
畏まる者ハ禍を招く。自ら満たざる
者を益を受け。自ら足せりとせざる者

く聞我博くを。頌體集

○門内嬉笑怒罵を聞くこと罕きことを其家範知るべし。座右多く名語格言を書き置バ。其志趣知るべし。同上

○楊慈湖曰く。智ある者ハ問を好て樂く。智なき者も自ら用ゐて憂ふ。畜徳録

○人の小過を責めば。人乃陰私を發せど。人の舊惡を念えざる人。眞は是妙人

あり。紳瑜

○忍を亦辨あり。勢を畏きて忍ぶ者ハ忍と為まは足らぬ。畏る可きの勢無くして忍ぶ者ハ。是を眞に忍と爲ん。同上

○人より恩を受けむ。必之を報ゆべきこと。猶人より借りたる金貨銭還さず。死に等し。勸善訓蒙

第十一章 警戒

○荀子曰く。人ふ三の不祥あり。幼より
て敢く長ふ事へば。賤ふ多く敢て貴ふ
事へば。不肖ふいて敢て賢ふ事へざる
は是れ人乃三不祥なり。

○不肖を以て人と待つ。愚者と雖ども
甘んぜば非禮を以て人成處を。賤者と
雖ども亦怨む。習是編

○食を節みそやが疾ふ。言と擇べむ

禍ふ。禍の生ずるは天より降るふあ
らば。皆其口より。西疇常言

○凡そ宴會賓客雜坐ハ。質疑問難の時
ふ非ば。詩文と講説。自ら博雅を誇る
ふあらず。恐らくも知らざる者之を恨
む。金言

○古人の是非を品評するハ可あり。今
人乃善惡を妄議するハ不可あり。恨む

我取るちと。多くハ妄議不在。言志

録

○才を猶劍のごとし。善く之を用ゐれ

ば。以て身を衛るべし。善く之を用ゐれば。

○人此癖を疑むるハ。卑夫の好む所なり。計らざるの禍を生むるこやあらん。智氏家訓

○人の善を聞て疑ひ。人の惡を聞て信

じて。大く長者の賤しむ所なり。計らざるの禍を生むるこやあらん。智氏家訓

○人の善を聞て疑ひ。人の惡を聞て信

じて。大く長者の賤しむ所なり。計らざるの禍を生むるこやあらん。智氏家訓

。好て人此短を説き。人の長我計らば。

其人平生必ば惡ありて善なり。願體集

○我が人如くざるを怨むる我休よ。

我如くある者尚衆し。我が人如く勝る

を誇ふを休よ。我如く勝る者還多し。紳瑜

○常は虚誕を説く者。時ありて信誠

のあとを言ふと雖ども。人之を信ぜば。同上

○大醉を人の不善を増む此も非ず。

更も人をして心も有せざるの不善を
生ぜす。勸善訓蒙

○朝も玄く食もぎせど。晝もては饑ふ。
少くと學ぶをせど。北かては惑ふ。饑
る者は猶なほ惑ふべし。惑ふ者は奈何とを
すべからん。言志録

○安逸を恣もちます。己が失を増し。才
能を恃もつ。人の嫉を招く。靜寄軒文集

○我が如く善を為さす。一介の寒士と雖も。
人の其徳を感ずるあり。我が如く惡を
為さす。位人臣を極むと雖も。人乃
其過ちを議する有る。同上

○人の貴賤を論ぜど。一日當さるは作す
事のあり。若し飽食煖衣して。事を
事とせずんば何ぞ好結果あるを得ん。
願體集

修身見訓卷之三 終

明治十三年十一月廿五日版權免許
 同 十四年五月二日出版
 同 十五年五月廿一日再版
 第廿三丁裏七行
 目重複アリ再版
 二付改正ス

編者出板

東京府主族地奥社長

龜谷行

和歌山製本所

平井父助

發兌

賣	和歌山 高市伊兵衛	麻生津 岡 忠兵衛	日高柳坊 岩本久兵衛
日	野田大二郎	妙寺 三浦松栄堂	日 小竹佐兵衛
日	津田源兵衛	九度山 今川嘉兵衛	日藤井 瀬戸伊右門
日	福田佐兵衛	野上 寺中八助	日 申水 森島嘉兵衛
日	山口久楠	日 吉本武兵衛	日 申水 神田清左門
日	中村庄三郎	其島 橋公傳左門	日 大隱寺橋第 吉岡平輔
日	平井清三郎	湯浅 陳座嘉七	日 田中太左門
日	兒玉仁兵衛	岩崎種之助	
日	名手 珍川		

稟准

東京炎風社

明治十四年之冬以
 後製本以此紙為証